

句集

生きる

長く教職にあつて定年を迎えられるのを待つように、万波さんに躊躇なく、「私たちといっしょに俳句をやってみませんか」と声を投げかけてみた。それというものも万波さんは中学生の頃から学習意欲旺盛で、特に国語については人一倍関心度が高く、学力も秀でていた。

序に代えて

その返事はおおよそ予想されていたが、やはり実際に会って話すのが確かであり、誠意が伝わると考え直し、何十年ぶりかで逢うことにした。そのとき私は主たる数種の俳句結社誌を持参し、その中から一つの俳誌を選択されることを勧めた。

その後、いろいろ検討されたことと推察される。公民館活動のこと、町内会や私事のこと、将来ずっと続けられるだろうか、いろいろ躊躇されたことだろう。数日後の返答は、やはり内観造型の石原八束師系の「秋」だった。やがて岡山県現代俳句協会総会の席上、新会員として紹介され、みなの手拍で迎えられた。その後の万波さんは水を得た魚のように、つぎつぎと近作を郵送してきては添削や選句を希望

するようになった。その手法もしばらく続いただけで、自作自選の記号を付けて、選評だけを望まれるようになった。これも「秋」同人に推挙された自覚の一端によるものと考えられ、句集の上梓を勧めた。

その反映がこの『生きる』である。当初は「ひとり」と題する意図のようだったが、それはむしろ編目に回して喜怒哀楽の心情を濃縮し、俳味を高め力感を表すには「生きる」のほうが読み手の共感を呼ぶだろうということで一致した。

さて、「ひとり」の編目では、

考妣ちちははの使者ははかもしれぬ夏燕

納屋にまだ考うちの匂ひの夏帽子

送り火や風を残して御霊ゆく

天空にひとりぼつちの月今宵

幻聴の考妣ふぼのこゑする冬紅葉

などの作からご両親と死別した作者の哀感が深く伝わってくる。

「花」の編目からは、

満開の桜並木の線量計

飛花ふわりふわり浄土へ誘へり

曼珠沙華一本咲いて風変わる

コスモスと夕風に身をゆだねをり

この校も閉じることなり辛夷咲く

などの句柄から、花のいのちのはかなさや、花へ同化していく自らを内観する切なさが感受され、胸が熱くなってくる。

「小さきものたち」の編目からは、

草萌や土手ゆく園児はしるはしる

麦秋の黄金の海を下校の子

蜥蜴出て泣く子つかむ子喜ぶ子

蟋蟀に逃げよにげよと草を焼く

これらは教職にあった長年の心眼が働き、蕉風というより小林一茶の心情が如実に伝わってくる。割愛した「乗初の父親……」の句はほのぼのとした家族愛の代表作として感涙にむせぶ場であろう。

「自然」の編目で印象の濃い句には、

永忠を語る石堀楷若葉

秋の風備前の壺に変へてみる

秋出水水面を照らす茜雲

黄金の葉ばつさり落とす大銀杏

この編目では郷土色豊かな秀品を選んだ。第一句は津田永忠の業績を讃える句。氏は日本初の庶民の学校「旧閑谷学校」の設立に尽力された偉人。楷の木は学問の木で今なお受験の観光客が絶えない。第二句は備前焼、陶芸まつりは全国版である。第三句は県三大河川の一つ吉井川、台風被害も大きいが田畑を潤す恩恵は大きい。第四句の「大銀杏」は那岐山麓の菩提寺のものが特に有名（天然記念物）である。

「なつかしき日日」の編目では、特に生前の父と母に絞って印象の濃い作を挙げてみたい。

水中花硬直すすむ父の足

湯気の中もちつく父とこねる母

病床の父にもとんどの炭を塗る

これらは悉く悪夢にも類する幻想風景である。遺影や位牌を前に合掌する心の内が偲ばれてくる。

最後の「生きる」は、本句集の命題で万波さんの今後の生き方を俳句に詠出している。この句集を世に問うこと自体がプラス志向であり、「私には俳句がある、俳友がいる。縁者もいる……」の句境が如実に具現されている。

病葉を一病として伸びる枝

葛の花付く刈られても刈られても

突つかれて転げても瑠璃竜の玉

引き算を足し算にして木木芽吹く

この処女句集『生きる』は、万波さんの全身全霊を傾けて成ったもので、亡きご両親の御霊安かれと奉納されるときにも、今後とも同人誌『秋』の発展に、先人・良友とともに一層の研鑽を重ねられることを祈念し、擱筆します。

二〇一九年 九月吉日

「秋」同人 國定 義明

目次

序に代えて

ひとり

花

小さきものたち

自然

なつかしき日日

生きる

あとがき